



田んぼわらしの ささやき

田んぼ 10年だより

第22号 2021年9月17日発行

田んぼの生物多様性向上10年(略称:田んぼ10年)ニュースレター
 発行: NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ) 水田部会
 所在地: 〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F
 TEL/FAX: 03-3834-6566 電子メール: info@ramnet-j.org
 ホームページ: http://www.ramnet-j.org

目次

ポスト2020 水田の生物多様性向上のための学習会「気候変動と水田」ラムネットJ 理事 原野好正	1~2
「Flying Geese を探せ！」 齋藤 肇	2~3
「シジュウカラガン物語」 日本雁を保護する会 呉地正行	3
「田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト」	4
水田部会からのお知らせ・編集後記	4

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

[オンラインイベント] ポスト2020 水田の生物多様性向上のための学習会「気候変動と水田」

ラムネットJ 理事 原野好正

農林水産省の「みどりの食料システム戦略」が策定され、生物多様性条約のポスト2020 枠組みや次期生物多様性国家戦略なども検討作業が進んでいます。ラムネットJでも、田んぼ10年プロジェクトのこれまでの成果と課題を踏まえ、2021年以降の活動計画を準備中です。

この新計画策定の一環として、2021年8月30日に、道家哲平さん(国際自然保護連合(IUCN)日本委員会事務局長)と、谷津田の再生などに取り組む西廣淳さん(国立環境研究所)を講師にお招きして学習会を開催、ラムネットJ会員をはじめとするNGO関係者、自治体関係者など約70人がオンラインで参加しました。

道家さんからは「国際的な枠組みと農業への期待」と題して、生物多様性条約などで議論されている「生物多様性と農業」についての報告がありました。

IPBES(生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム)の報告書によると、この50年で農業は現代の福利向上に寄与した一方、同時に未来のリスクも増加させているそうです。陸域の生物多様性の危機は、農業・林業を含めた「土地利用」が大きな要因を占め、解決のためには価値観レベルでの社会的変革が必要とのことでした。

また、地球規模生物多様性概況第5版(GB05)では愛知目標の達成度が評価されていますが、農業分野と深い関わりのある「目標7」の評価は「進展はあったが、達成できていない」。持続可能な農業・林業・漁業の取り組みは拡大し、農家が主導する農業生態系の手法も広がりを見せているものの、農

薬や化学肥料の使用量は高水準で横ばいし、農業が生物多様性損失のおもな背景要因となっていると書かれています。生物多様性の回復には自然保護だけでなく、持続可能な生産や消費が不可欠なのです。

現在、生物多様性条約で検討されているポスト2020 枠組みでも、農業に関係する項目は多く、有機農業の推進による土壌の生物多様性の向上が、気候変動対策にも効果的との指摘もあるそうです。

西廣さんからは「気候変動適応策における水田や耕作放棄水田の役割」をテーマに報告がありました。

まず注目したのは、気候変動には、気温上昇、海面上昇など「一方向への変化」と、年間降水量自体は変化しないが、豪雨・渇水の増加など「変動性の増加」の2つの側面があるということです。また、気候変動の対策には「緩和」と「適応」があり、「緩和」は温室効果ガスの排出を削減し、気候変動の進行を緩和することで、「適応」は現在・将来のさまざまな環境変化に柔軟に適応できる社会にすることを確認しました。

「緩和」の視点では、田んぼは温室効果ガスのメタンの発生源であるという指摘もあるものの、管理方法によってメタン発生量は大きく変わり、バイオ炭の活用などで脱炭素に貢献できる可能性もあるため、今後の考察が必要とのことでした。

気候変動適応策には、農林水産業、水環境・水資源、自然災害、暑熱・健康、産業・経済活動、国民生活、自然生態系の7つの課題がありますが、田んぼはこれらすべてと深く関わっているそうです。



IUCN 日本委員会 道家さん



参加者と共に・オンライン集合写真



国立環境研究所 西廣さん

気候変動の進行を前提とした農業対策として、現在は高温耐性品種の導入・普及が注目されていますが、これは「一方への変化」には効果的なものの、「変動性の増加」には脆弱。品種の多様性、農法の多様性、水源の多様性など、広い視点からの方策が必要なのです。

また、「縦割り型」による弊害にも注意が必要です。たとえば、「ため池措置法」では、利用されていないため池は国の予算での廃止工事が可能です。これは近隣住宅地への安全確保には有効ですが、生物多様性の保全や水源確保の視点では矛盾があります。流域スケールでみると、「管理放棄されたため池」も防災上の機能を有しているため、複数の影響・効果を同時に考慮する俯瞰的な視点が重要だといいます。

西廣さんは事例研究の一環として、印旛沼の谷津で耕作放棄水田の湿地化に取り組んでいるそうです。谷津の田んぼは生産量が少ないものの、生物多様性の保全・治水・水質浄化な

ど多面的機能を有しています。土手の維持や水路の補修などで、復田ポテンシャルも維持できるため、遊休田んぼの活用は気候変動への適応の側面からも有効な手段であることを学びました。

道家・西廣両氏の講演のあと、金井祐さん（ラムネット J 共同代表）のファシリテーションでオンライン参加者からの質疑に両氏が答え、さらに議論を展開しました。耕作放棄地の手入れが農家にとってメリットが少なくても、気候変動への適応という視点からは意義があるため、ため池や田んぼの役割を理解して拡げることが重要であるとの発言がありました。そのためには、土地所有者（農家）と利用者（非農家）の間で価値観の共有が重要だと気づきました。

これらの議論を踏まえて、ラムネット J では新しい水田計画の策定を進めています。



Flying Geese を探せ！の活動が高く評価されました

プロジェクトリーダー 齋藤 肇

これまでの十数年の「Flying Geese を探せ！」の活動に対し、5月16日、令和3年度みどりの月間(第75回愛鳥週間)「全国野鳥保護のつどい」にて野生生物保護功労者として環境大臣賞をいただくことができました。予想もしていなかった大きな賞で関係者一同びっくりしていますが、同時にこれからもやっつけよう！という勇気もわいてきました。



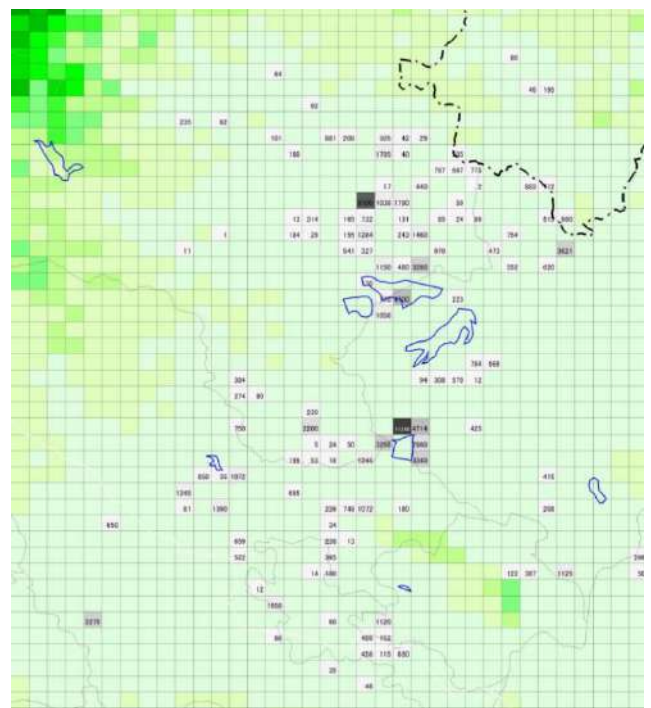
表彰されました。なんと環境大臣賞！

蕪栗沼でねぐらをとるマガンたちは、昼間どこで過ごしているのだろう？ そんな素朴な疑問から2005年に始まったガン類の昼間の分布調査が「Flying Geese を探せ！」です。蕪栗沼、伊豆沼、内沼など、大きなねぐらから飛び立つガン類については行政によって定期的に調査が行われていますが、人手のかかる昼間の分布調査は手つかずでした。

「Flying Geese を探せ！」によって越冬期のガン類の昼間の行動が少しずつ分かってきました。11月から2月までの毎月1回、宮城県北部を中心に行うガン類の分布調査は、調査区を自動車で行きまわって、ガン類の群れを見つけては種毎にカウントする作業の繰り返しです。寒い中、一見単調で辛い調査に見

えますが、小中学生からベテランまでが気さくに交流できる学習の場にもなっています。毎月20名前後が調査に参加してくれているので、宮城県全体の約7分の1の広さを調査できています。一斉調査日以外にも観察情報が寄せられてきて、「栗駒山を越えて北へ向かった」といった渡りに関係する行動記録もあります。こうした情報交換も互いに良い刺激になっています。

市民調査でこれだけ広範囲な調査もあり例がないかもしれませんが、最初の頃はデータのとりまとめに苦労する場面もありましたが、最近はNPO 法人田んぼが担当してシーズンごとの報告書をまとめています。マガンの越冬数の増加に伴って採餌場所も拡大しています。マガンの毎年の分布変化の傾向と、最近個体数が増えてきたシジュウカラガンの分布とがかなり異なることなど、分布図としてまとめてみると様々なことが見えてきます。



調査結果は環境省の3次メッシュごとに集計しています

かつて日本全国で見られたガン類は、今ではごく限られた地域でのみ越冬しています。宮城県北部は日本で越冬するガン類の9割前後の個体数が集中しています。昼間の採餌場所ですら、東京 23 区の人口密度に匹敵するガン類が密集することもあるほどです。ガン類がたくさん見られることは地域の誇りですが、極度に集中した群れを分散化することも必要です。「Flying Geese を探せ！」の結果から、ガン類の分散化に向けたヒントを見つけていきたいです。

11 月から 2 月までの毎月第二日曜日が一斉調査の日です。興味のある方はぜひご参加ください。

お問合せ：sagiyama@kdp.biglobe.ne.jp (ふなはし)



田んぼに降りて落ち穂を食べるマガン



シジュウカラガン物語～しあわせを運ぶ渡り鳥、日本の空へふたたび！ 日本雁を保護する会 呉地正行

かつて「10 羽のうち、7、8 羽を占めた」ほど多かったシジュウカラガンが、なぜ絶滅の淵に追いやられ、どのようにして復活できたのかについて、その経緯とその背景をまとめた本です。

シジュウカラガンを絶滅に追いやった、繁殖地の千島で日本領時代に行われた、キツネの放飼（養狐事業）についての新たな情報なども含め、以下のような内容が密度高く盛り込まれています。

書籍名：『シジュウカラガン物語～しあわせを運ぶ渡り鳥、日本の空へふたたび！』

呉地正行 + 須川恒（日本雁を保護する会）編

発行：京都通信社・A5 版、304 ページ

販売価格：2700 円 + 税（2970 円）（7/15 発行）



● 40 年にわたる回復事業が始まった経緯、日ロ米の関係者の強い絆に基づく協働作業、課題の解決とその成果、未来に向けての取り組みを、10 章構成で紹介。

● 口絵の 38 枚のカラー写真で、シジュウカラガンの繁殖地、中継地、越冬地、日ロ米での共同活動などの様々な場面を項目別に紹介。

● 様々な分野の方に、「強い思いが、困難な道を切り拓く」というメッセージを送る本

● 日本雁を保護する会の歩みがわかる、創立 50 周年記念出版物

● 様々な分野の方に読んでいただきたい本

◆◆◆ご購入申し込み・問い合わせ先◆◆◆

- 京都通信社
<http://www.kyoto-info.com/kyoto/books/>
- 雁(かり)花(ふらわー)工房（著者サイン入り）
<https://kf-koubou.booth.pm/>
- 日本雁を保護する会：gan.g.kurechi@gmail.com
TEL 0228-32-2004

◆◆◆ もくじ ◆◆◆

はじめに 群れよ、日本の空にふたたび！

第 1 章 絶滅したシジュウカラガンを復活させたい

第 2 章 シジュウカラガンの生態と人とのかかわり

第 3 章 絶海の島に奇跡の小さな群れを発見

第 4 章 日本の回復計画の成功と失敗

—— 潜んでいた落とし穴

第 5 章 伝説の鳥類学者、ニコライ・ゲラシモフとの邂逅

第 6 章 日ロ米の 3 国で共同プロジェクトがはじまる

—— カムチャツカに繁殖施設をつくり、放鳥を開始

第 7 章 カムチャツカで数を増やし、エカルマ島に放鳥する

第 8 章 「増やそうシジュウカラガン」、「減らそうカナダガン」

第 9 章 五〇〇〇羽の群れが北日本の空を舞う！

第 10 章 未来に向けた活動

—— ガンとの共生をめざす「ふゆみずたんぼ」

日ロ米で物語を見守る三人からのメッセージ

おわりにかえて

物語のおわりは、あらたな物語のはじまり

参考文献／索引

「シジュウカラガン物語」出版



<http://bit.ly/3ikNNHu>



7/15 書籍発売 記者発表会にて



水田部会からのお知らせ



新計画の名称「田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト」に決定

水田部会では、「田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト」に代わる新計画作りに取り組んでいます。これまでの活動の成果や課題をベースに、SDGs やポスト 2020 目標を取り入れた計画になる予定です。8 月 30 日開催の学習会「気候変動と水田」のあとに開催した戦略会議でこの名称が決まり、現在計画の枠組みを作っているところです。名称にも表されているように、地域の文化の多様性も取り入れることにしています。新計画キックオフイベント（12 月 12 日 開催地：小山市）で初公開し、改めて参加者を募集していく予定です。新計画に盛り込むべき項目など、皆さんからのご意見を募集中です。

新計画キックオフイベント

（予定）

2021 年 12 月 12 日

13:30~15:30

小山市立文化センター

小山駅西口から徒歩約 10 分



「田んぼの生きものを育むお米たち」の掲載情報を募集しています。ウチの田んぼには、こんな生きものが居て、こんなことを気にして栽培しています。といった情報とお米の入手情報を事務局までお送りください。随時、田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクトのお米の紹介サイトに掲載します。詳しくは、こちらのサイトをご参照ください。 <https://tambo10.org/>



情報をお寄せください

田んぼ 10 年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。



是非、皆様の活動の様子を、メーリングリストや田んぼだよりでご紹介ください。

寄稿歓迎！

また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」というご希望もお寄せ下さい。

編集後記

夏が過ぎ、収穫の秋を迎えました。プランターのイタリアンパセリをキアゲハの幼虫が食べてしまいました。生きものに囲まれて生活していると、生物への目線が優しくなると思います。先住民・地域住民・小規模農家などは地域の生物多様性を管理してくれている大切な人々であり、その暮らし・権利を守るための様々な活動が、世界自然保護会議（WCC）やポスト 2020 目標作業部会で議論されています。生物多様性・気候変動・人獣共通感染症パンデミックなどによる危機の回避と回復のためには、こういった人々に予算を回すべきという強い意見があり、そのとおりと思いながら会議に参加しています。



安藤よしの



連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本

info@ramnet-j.org

FAX: 03-3834-6566



田んぼ 10 年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
田んぼ 10 年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、
国連生物多様性の 10 年日本委員会の連携推進事業に認定されています。

